

コロナ禍と聖書解釈 —詩篇の最終形態から考える—

鎌野直人

I. はじめに

2020年初頭から世界を覆い尽くしているコロナ禍とどのように向き合うのか。全世界的に、そしてあらゆる分野で1年以上、この問いが検討されている。当然、キリスト教会においても、様々な意見が提示されてきているし¹、これからも議論は継続するだろう²。

本稿では、聖書解釈を通してコロナ禍が明らかにしてきた課題に向き合うことによって、キリスト教会は何を学ぶのか、という問いを取り上げる。まず、筆者の解釈学的スタンスを明らかにした上で、コロナ禍が明らかにした課題について検討し、その課題に聖書解釈の観点から具体的に向き合い、最後にキリ

¹ 2020年前半の段階からコロナ禍に焦点を当てて日本語で出版されている書籍で、プロテスタントの立場から書かれたものに、ジョン・レノックス『コロナウイルス禍の世界で、神はどこにいるのか』山形優子フットマン訳、森島泰則監訳（いのちのことば社、2020年）、ジョン・パイパー『コロナウイルスとキリスト 未曾有の危機に聖書を読む』渡部謙一訳（いのちのことば社、2020年）、N・T・ライト『神とパンデミック コロナウイルスとその影響についての考察』拙訳（あめんどろ、2020年）がある。カトリックの立場からのものに、教皇フランシスコ『パンデミック後の選択』カトリック中央協議会出版部訳（カトリック中央協議会、2020年）がある。

² たとえば、『文藝春秋』2021年9月号（文藝春秋、2021年）では、若松英輔と山本芳久による「神学者がとらえたコロナ危機」という題の対談が掲載されている（158-185頁）。

スト教会がそこから学ぶことを提案する。

A. コロナ禍が生み出した問いにどのように向き合うか

コロナ禍が明らかにした課題に向き合うにあたって、以下のような形で問いを立てることが多いだろう。(1) コロナ禍の原因はなにか。(2) コロナ禍の今、なにをなすべきか。(3) コロナ禍のあと、世界はどう変わるのか、変わるべきか。コロナ禍という出来事を分水嶺にして、その前後で時代が大きく変わる、という理解に則った問いの立て方である。東日本大震災などの自然災害という観点からも、このような問いの立て方は重要である。しかし、神学的に何かを検討する際、このように問いを立てることはどうだろうか。残念だが、コロナ禍こそが現代人に対する神のみこころを示す「究極的なしるし」である、という考えに傾く危険性がある。

キリスト教神学的に問いを立てる場合、神のみこころをしめす最大のしるしとはキリストの十字架と復活である。したがって、キリスト後の21世紀に生きる私たちはつねに、「キリスト前、キリスト後」という枠組みで物事を捉えるべきである³。つまり、「キリスト後に生きる私たちがコロナ禍をどう見るのか」と問いを立てる必要がある。

そこで本稿では「コロナ禍前、コロナ禍、コロナ禍後」という時間的な経緯で論じるのではなく、次のように問いを立てたい。(1) コロナ禍は現在の何を明らかにしているのか。(2) だからこそ、今、何をすべきなのか。最初の問いについては、近年の出版物を参照し、そこで強調されている点から答える。そして、第2の問いについては、詩篇を検討することを通して考えていく。

B. コロナ禍が明らかにしたこと：貧富の格差の急速な拡大

コロナ禍の中で社会がどのように変化していったのか、その動向を見る上で、森達也が編集を担当している『定点観察 新型コロナウイルスと私たちの社会』

³ このあたりはライト、前掲書、30-39頁で詳しく論じられている。

という一連の本がよい資料となる⁴。このシリーズでは、医療、貧困、ジェンダー、労働、文学・論壇、ネット社会、日本社会、哲学、教育、アメリカ、経済、東アジア、ヘイト・差別、難民などの各分野を1年半にわたって観察し、その変化を継続して追っている。当然、それぞれの著者の視点が色濃く表れているので、一般化することは難しいが、大きな傾向を掴む上では、これらの本は有効である。

このシリーズの中で、コロナ禍が明らかにした多種の問題点が指摘されている。貧困の深化、DV被害者が被る不利益、デジタル化の遅れ、権力者に見られる統治能力の欠如、国家間の分断と対立、陰謀論の流布とSNS、ヘイトと差別の拡大、同調圧力、報道機関の忖度、専門知識の軽視、大衆と指導者の間のコミュニケーション不足など、社会に潜在しているあらゆる問題点がこのときに一気に顕在化してきた感がある。それとともに、これらの問題点の底流に流れているのは、格差の拡大である。困窮者の増大、外国人労働者の苦況、非正規雇用者、特に女性の直面する困難、困窮者に広がる諦観、アルバイトが必要な学生の窮状、生活のために仕事を休めない人の受難、子どもたちの苦しみと不登校の増大、中小企業の淘汰という言葉など、貧窮する者がより一層苦しむという現実が指摘されている。

アメリカ合衆国のケースではあるが、コロナ禍直後に一度、急激に株式市場は大きく下がったが、それ以降、好況に沸き、近年まれに見る最高値を付けている。これは富裕層の繁栄を示唆しているものである。また、ロックダウンなどのために多くの人が在宅勤務を余儀なくされてきた。その中で、年収10万ドル以上のホワイトカラーの多くは在宅勤務が可能であり、その結果、裕福な家庭は家族と過ごす時間を増やすことができた。しかし、年収4万ドル以下の階層は、在宅勤務がほとんどできずにリスクを負いながら出勤して働き、最悪

⁴ 森達也編『定点観察 新型コロナウイルスと私たちの社会 2020年前半』(論創社、2020年)、森達也編『定点観察 新型コロナウイルスと私たちの社会 2020年後半』(論創社、2021年)、森達也編『定点観察 新型コロナウイルスと私たちの社会 2021年前半』(論創社、2021年)。なお、世界大のレベルでコロナ禍が明らかにした課題を指摘しているものに、ファリード・ザカリア『パンデミック後の世界 10の教訓』上原裕美子訳(日本経済新聞出版、2021年)がある。

の場合にはレイオフさえも経験している⁵。

このように、コロナ禍を通して、貧富の格差の急速な拡大が進んでいる。貧富の格差はあらゆる時代に存在していたが、第二次大戦後、先進国における中産階級の増大や発展途上国の成長などによって一時期、是正されるかとも思われた。しかし、コロナ禍は、現在進みつつあった貧富の格差の増大のスピードを一気に上げた。コロナ禍を聖書解釈から思索する本稿において、聖書が描く適切な社会の指標ともいえるべき貧しい人の増大に対して教会がどのように向き合うべきかを考える以上に適切なテーマは存在しないだろう。

C. 問題設定：貧富の格差の拡大に教会はどのように向き合うのか、詩篇から考える

貧富の格差の急速な拡大というコロナ禍が明らかにしてきた現実を踏まえて、本稿では、「貧富の格差の拡大に教会はどのように向き合うのか」という問いを聖書解釈の視点から取り組むこととする。

この問いへのアプローチは様々な方法がある。たとえば、聖書が貧しい人をどのように描いているかを概観することによって、取るべきアプローチを検討する方法がある⁶。本稿では、貧しい人について繰り返し語られている詩篇を、その最終形態を重んじて読むことを通して、この問いに対してアプローチをする。

なぜ聖書、とくに旧約聖書全般に関わる貧しい人への取り扱いを、詩篇に限定し、さらにその最終形態を重んじるアプローチで読み解くのか。そこには2つの理由がある。

まず、限られたスペースの中でこの問題を取り扱うにあたって、焦点を旧約聖書の一書に限定する必要がある。その際、律法、例えば申命記や、預言書、例えばエレミヤ書を選ぶことも可能だろう。しかし、詩篇はその神学的な視野

⁵ スコット・ギャロウエイ「新型コロナで強力になった GAFA」『コロナ後の世界』大野和基編（文藝春秋、2020年）161–162頁

⁶ この立場での取り組みとして、たとえば、Jeslie J. Hoppe, O.F.M., *There Shall Be No Poor among You: Poverty in the Bible* (Nashville: Abingdon Press, 2004) がある。

や多様性から、マルティン・ルターが「小聖書」と呼んだ通り⁷、旧約聖書の神学的視点を代表するにふさわしい書である⁸。

次に、最終形態としてまとめられた詩篇を、その表題を重んじつつ読むアプローチは、Brevard S. Childs の正典的アプローチに端を発したものである⁹。このアプローチの特徴として、表題を「詩が作られた際の歴史的背景を記録しているもの」としてではなく、「それぞれの詩ならびに詩篇全体を解釈する文脈を提供している」と考える。たとえば、3篇には「ダビデの賛歌」（新改訳2017）もしくは「賛歌。ダビデによる」という意味の表題が付けられている。この表題を重んじて3篇を読むということは、無名の詩人の歎きの祈りとしてこの詩を理解するのではなく、一人称単数で語る「ダビデ」の声を聞くということの意味する¹⁰。一人称単数（「私」）の語りを通してダビデのエートス（話者としての人格）が明らかにされるのだ¹¹。さらに、「ダビデによる」詩が連続して並べられている場合、そこに何らかの連続性を想定して、詩篇を読み進めることをも意味する¹²。そして、詩篇全体の大きな流れをも神学的な意義のあ

⁷ Martin Luther, “Preface to the Psalter” (1545 [1528]), in *Luther’s Works Volume 35: Word and Sacrament*, ed. E. Theodore Bachmann (Philadelphia: Muhlenberg Press, 1960), 254–255.

⁸ William P. Brown, *Deep Calls to Deep: The Psalms in Dialogue amid Disruption* (Nashville: Abingdon Press, 2021), 15–17.

⁹ Brevard S. Childs, *Introduction to the Old Testament as Scripture* (Philadelphia: Fortress Press, 1979), 511–522.

¹⁰ このような読み方は、その詩の歴史的著者が「ダビデ」とであると同定し、史的ダビデの歴史的な文脈の中で理解する読み方に限定することを意味しない。無名の詩人が書き、神殿において歌われてきたものが、詩篇の編集の過程で「ダビデ」が語ったものとして受けとめられ、ダビデの歌として理解するようにまとめられた可能性も含む。

¹¹ 一人称単数の語り手と語り手のエートスについては、Naoto Kamano, *Cosmology and Character: Qoheleth’s Pedagogy from a Rhetorical—Critical Perspective* (Berlin: Walter de Gruyter, 2002), 4–8, 20–24 を参照せよ。

¹² たとえば、Gerald H. Wilson, *Psalms: Volume 1*, The NIV Application Commentary (Grand Rapids: Zondervan, 2002) や Nancy deClaissé—Walford, Rolf A. Jacobson, and Beth LaNeel Tanner, *The Book of Psalms*, NICOT (Grand Rapids: Eerdmans, 2014) は正典的なアプローチから詩篇を読んでいる。同様の視点から詩篇にアプローチしている日本語の論文としては、拙著『神の人モーセの祈り』（詩篇 90 篇）の意義』『福

るものとして考慮することが可能となる上に、詩篇が5巻に分けられていることやそれぞれの詩の配置にも意義があることを前提することができる¹³。

II. 詩篇は貧しい人についてどのように語っているのか

詩篇は貧しい人をどのように描いているのだろうか。

まず、113篇を検討して、詩篇全体を検討する手がかりとする。続いて、貧しい人であるダビデの姿の描写と貧しい人のために行動する主の姿の描写を検討し、詩篇全体にある大きな流れを浮き彫りにする。

A. 113 篇

詩篇 113 篇は「賛美の歌」のジャンルに分類され¹⁴、113:1-3 が「賛美」、113:4-9a が「賛美の理由としての信仰告白」、113:9b が「賛美」と分解できる。

賛美そのもの (113:4-9b) の部分に貧しい人が登場する。לַחֲלוּ (「弱い者」と אֶבְיָוִן (「貧者」) である (113:7)。詩篇にはこの2語以外にも同様の存在を表現する語がある。82:3-4 には עֲנִי (「苦しむ者」) や רָשָׁע (「乏しい者」) が「みなしご」とともに言及されている。これらの四つの語のそれぞれがどのような人々を指すのかについては、微妙なニュアンスの違いはあるが、大まかには土地や権力や経済力をもたず、経済的には他者からの助けを常に必要としている存在を指していると考えることができる¹⁵。さらに、עֲנִי と共通の語根からなる עָנָו (「貧しい者」) も詩篇には登場する (新改訳2017では「貧しい人」と訳される場合が多い)。עָנָו と עֲנִי にはニュアンスの違いは存在するものの、本文批評上の混同も見受けられるために、厳密な区別が難しい場合も多

音主義神学』第36号 (日本福音主義神学会、2005年) 2-13頁がある。

¹³ この分野の草分けの研究としては、Childsの下で書かれた博士論文である、Gerald Henry Wilson, *The Editing of the Hebrew Psalter* (Chico: Scholars Press, 1985) がある。

¹⁴ たとえば、B・W・アンダーソン『深き淵より 現代に語りかける詩篇』中村健三訳 (新教出版社、1989年) 301頁を見よ。

¹⁵ Eugene H. Merrill, "אֶבְיָוִן," *NIDOTTE*, 1:226.

い¹⁶。そこで、本稿では לַחֲלוּ、אֶבְיָוִן、עֲנִי、רָשָׁע、עָנָו を、貧困を含めた苦しみを経験している人々を表現する語と考え、これらの語で呼ばれている人を「貧しい人」としてまとめて考える。なお、113篇には「子のいない女」(113:8)も登場する。経済的な側面に関しては様々な可能性も考えられるが、先述の「みなしご」同様に一種の苦しみの中にある社会的弱者であろう。

さて、113篇において、貧しい人たちを「ちりから起こす」や「あくたから引き上げる」(113:7)と述べられている。貧しい人たちが比喩的な意味で低い位置に置かれていることが示唆されている。その一方で、נָדִיב (「高貴な人」)(113:8)は、貧しい人を抑圧する存在としては描かれてはいない。ここでは、富者であり、気前のよい人を指しており¹⁷、貧しい人たちが引き上げられたとき、ともに座るようになる存在である。一般的には、עֲשִׂיר (「富む者」)が貧しい人と対照的に用いられている (一例として49:2[HB3]では「貧者 (אֶבְיָוִן)」と対を形成している)。彼らは貧しい人に比べて高い位置に置かれている。

主はどうだろうか。113篇によると、主は「すべての国々」の上にある。また、主の栄光は「天」の上にある (113:4)。主は、その座に着くために自らを高くする (113:5)。それと同時に、天と地を見るためには自らを低くする (113:6)。これらの表現からわかるように、主は天と地を含むあらゆる被造物よりも高い位置にいる。「だれが、私たちの神、主のようであろうか」(113:5)と詩人は感嘆しているが、主が比類ないほどに高い位置にあることに対する驚きからのことばである。

ただし、主は高い位置に留まっているわけではない。着座のために自らを高くする (113:5) が、天と地を見るために自らを低くする (113:6)。そして、低い位置に置かれている者たち (「弱い者」と「貧しい者」) を引き上げて、「高貴な人」のいる高い位置に据え、そこにある座に着かせる (113:8)。「ちりから起こす」や「あくたから引き上げる」(113:7)とあるように、主は貧しい人を引き上げることができる。113:7-8が男性に焦点を当てている一方で、113:9は女性に焦点を当てている。「子のいない女」が登場する。主は彼

¹⁶ W. J. Dumbrell, "עָנָו," *NIDOTTE*, 3:454-456.

¹⁷ Eugene Carpenter and Michael A. Grisanti, "נָדִיב," *NIDOTTE*, 3:31-32.

女を「息子たちの母 (אִם־בְּנֵיהֶם)」とともに家の「座に着かせる」(113:9)¹⁸。古代社会における子どもを生むことの重要性を考えると、113:8の男性のケースと同様に、主が社会的弱者の位置にある女性を引き上げていることが描かれている。

主は下って、天と地を見る(113:7)。特に地を「見て」、そこにいる低い者を認め、彼らのために行動する。主は貧しい人を守り、彼らを引き上げる。この一連の行動のゆえに、主を賛美するようにと、詩人は人々を招いている(113:1-3, 9b)¹⁹。

さて、113篇を高低の位置の違いとそこでの動きに焦点を当てて検討してきた。そして、次のことが明らかとなった。(1) 高低の違いは存在し、最も高いところから低いところに向かって、主、天、地の順にある。(2) 貧しい人は最も低い位置に置かれている一方で、高貴な者は彼らよりも高い位置にある。(3) 主は最も高い位置にあるが、自らを低くし、最も低い所を見、そこにいる低い者を引き上げることができる。

それでは、以上の観点から、詩篇全体を見ていこう。貧しい人と彼らを虐げる者がどのように描かれているのか、貧しい人はだれとして描かれているのか、主はそこでどのように関わっているのか、そして、主のわざをするのは誰か、という課題について以下では問う。

B. 貧しい人であるダビデ

詩篇の5巻の区分は、詩篇全体を一つの文学として理解し、その大きな流れを鳥瞰する上で重要なものである。そこで、各巻の区切りも重要視しつつ、貧しい人がどのように描かれているのかを見る。

¹⁸ 「座につく」という行動は、最も低い位置にいる者には不可能である。低いところから上げられて初めて座に着くことが可能となる。

¹⁹ 最も高いところから下り、最も低いところにいる者を高い所に引き上げる主の動作は、主が創造した「日」の「昇る」と「沈む」という動作と並行である点は修辭学的に興味深い(113:3)。被造物は主の動きを何らかの形で映している。

1. 第1巻

第1巻(1~41篇)のうち、1, 2, 10, 33篇には表題はなく、それ以外の表題をもつ詩篇にはすべて「ダビデによる (דָּוִדִּי)」というひとことが含まれている。9~10篇のつながりを考慮すると²⁰、3~41篇はダビデが語っている詩であると読むことができる。

貧しい人が最初に登場する詩は9~10篇である。主が「貧しい者たち (עֲנָוִים)」の叫び²¹(9:12[13HB])や「貧者 (אֶבְיֹן)」を忘れないこと(9:18[19 HB])、「苦しむ者たち (עֲנִיִּים)」にとっての希望は主の対応²²であること(9:20[19 HB])が描かれたあと、貧しい人である「私」が主に向かって

私をあわれんでください、主よ。

私を憎む者が原因となっている私の「苦しみ (עֲנִי)」を「見てください (רֵאֵה)」。(9:13[14HB])²³

と嘆願している。貧しい人ダビデの苦しみに主が注視するよう求めているのだ。「私」を苦しめる悪しき者は、高ぶり、誇り、高慢であり、「神はいない」とまで言い切る(10:2-4)。彼らは「苦しむ者 (עֲנִי)」に追い迫り(10:2)、捕らえようと待ち伏せる(10:9)。さらに、神が「苦しむ者 (עֲנִי)」を「忘れている」、貧しい人を「見る」ことはないと心の中で語り(10:11)、「私」の9:13(14 HB)の切願を否定する。そこで、「私」は「貧しい者たち (עֲנָוִים)」を忘れないように主に懇願し、「貧しい者たち (עֲנָוִים)」の希望を聞くように祈る(10:17)。このようにして9~10篇では、貧しい人の一人であるダビデが、悪しき者に苦しめられている貧しい人の救いを祈り願っている。その一方で、敵がおごり高ぶったり(יָרוּם)、高慢な語り(דְּבָרָיו כְּבָאוֹת)をする様子が「私」から訴えられて

²⁰ 詩篇としてまとめられた最終形態で読む場合、Wilsonが主張するように9篇と10篇は一つの詩として読む必要がある。詳細は、Wilson, *Psalms*, 223-225を参照せよ。

²¹ Qereを採用する。

²² Qereを採用する。

²³ 以下、日本語テキストは新改訳2017に準拠した私訳である。